



# キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第19回

## 森本あんり

もりもと あんり  
国際基督教大学教授

# 聖書は人間中心主義か

アメリカのハーヴァード大学に「エマソン・ホール」という建物があります。映画「ある愛の詩」の舞台にもなりましたが、実は哲学部を擁する建物です。卒業生で哲学者だったラルフ・ウォルドー・エマソンを記念して一九〇〇年に建てられており、中にはエマソンの座像も置かれています。

そのエマソン・ホールの正面入り口の上には、大きなブロック体で次のように書かれて

います。WHAT IS MAN THAT THOU ART MINDFUL OF HIM (人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか)——聖書を読んだことのない人は、これをエマソンの言葉だと思いかもしれません。でも、『信徒の友』読者のみなさんはよくご存じでしょう。

そうです。これは詩編8編の言葉です。この詩編は次のように続いています。

「ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。すべての羊と牛、また野の獣、空の鳥と海の魚、海路を遡うものまでも」(口語訳、5〜8節)

ここには、人間が天地万物を治めて支配している、と書かれています。創世記の1章にも共通する思想ですが、「よろずの物をその足の下に」なんて、まるで人間が自然界に君臨する王者みたいですね。

近年の環境問題を憂える人々は、これらの言葉を読んで、聖書こそが人間中心主義の元凶だと言いました。キリスト教は、人間が自然を思うままに搾取したり破壊したりすることを是認している。聖書はそれにお墨付きを与えているのだ、というわけです。

しかし、わたしはそれはまったくの誤解だと思えます。詩編のこの言葉をもう一度よく読んでみてください。これは、人間の神への問いかけです。どうしてですか？と尋ねているのです。つまり、理由がわからないのです。神さま、あなたはいったいどうして、それほどまでにわたしたちをかえりみてくださるのですか、と問うているのです。

いや、もつとはつきり言えば、ちゃんと知っているのです。理由がわからなくて尋ねているのではなくて、「理由はない」ということを身にしみて知っているのです。なのにどうして？という「理由なき愛顧」への驚き

近年の環境問題を憂える人々は、

これらの言葉を読んで、聖書こそが

人間中心主義の元凶だと言ひ出しました。

キリスト教は、人間が自然を思うままに搾取したり

破壊したりすることを是認している。

聖書はそれにお墨付きを与えているのだ、というわけです。

しかし、わたしはそれはまったくの誤解だと思ひます。

こそが、この詩編になり、神への感謝と賛美に結実しているのです。

聖書は、人間の存在が自然世界の中で特別な位置を占めていることを率直に認めています。人間は、たしかに創造の冠として創られ、被造物の中心また頂点におかれました。しかしそれは、人間中心「主義」ではありません。なぜなら、聖書は人間がそのような高い地位におかれるべき理由が何もないことを知っているからです。

「わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思ひます。人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか」

この詩編作者は、自分が神の目からは月や星と何ら変わるところのない被造物にすぎず、

誇ったり思い上がったりする理由が何もない、ということを知っています。にもかかわらず、神はなぜかその自分に特別な恵みを与えてくださった——そのことに驚き、神を讃えているのです。

ところが、こうした聖書の驚きや感謝は、近代の進化論思想によってまったく失われてしまいました。人間は、優勝劣敗・弱肉強食の連鎖の頂点に立つ存在としての自負をもつようになり、優秀な自分が進化の頂点に立つのは当然の結果だ、と思うようになったのです。これが、人間中心「主義」です。

人間は、聖書では「支配せよ」と命じられています。命じられているなら、それは本当の主人ではなく、ただの管理者でしょう。いわば「雇われ社長」です。神を見失った近代

世界は、管理者にすぎなかったこの人間を主人の地位に押し上げてしまいました。そして、同じ被造物であるはずの自然世界に暴威をふるい始めたのです。環境破壊は、聖書の人間観が原因というより、むしろそれが見失われた結果なのです。

人間が他の被造物に比べて例外的に高い地位にあるという事実は、どんなにしても否定することができません。人間は「パンツをはいたサル」にすぎない、という人もいますが、まさにその「パンツをはいた」ということがすごいことではありませんか。その決定的な差異をうやむやにして、人間は自然や動物と一緒に、などと論ずるのは無責任です。

人間には、自然を破壊することもできると同時に、これを傷つけないように守り育もうとする力も与えられています。大規模な環境破壊を起こすのは人間だけですが、それを知ってくい止める努力をすることができるのも人間だけなのです。その事実を直視したうえで、責任をもってその力を行使することこそ、わたしたちに求められていることではないでしょうか。

ユニテリアン主義で物議を醸したこともあるエマソンですが、自然の美を通して超越神への信仰を表現しようとした彼の名前は、案外この詩編8編にふさわしいのかもしれない。